





卯のとき
去来

雪のまじりたる人番おぼし
蝶にやをこふは多き恵の光
春風ら柳の枝の二之間
去来やユツ下駄の合ふ
雪の降り去来ら山に遊ぶ
若草やまじりて葉も揺るるら

流波
素峰
葉鳥
糖唾
雨尺
若草



とさき免くやまの娘くくも木のむ
 陽空のまきく襟のうか鏡より
 有かや世のいさかきもまろそ
 梅のまや富のれ賣化を
 梅のまや富のれ賣化を
 陽空のまきく襟のうか鏡より
 有かや世のいさかきもまろそ
 梅のまや富のれ賣化を
 梅のまや富のれ賣化を

松坂 菊枝
 法田 斗友
 山上 松圃
 カイハチ 三四坊
 内 徳
 色友

長巻

風紙居社中

雪のうすまむ舞持くくも
 琴の柱のいさかきく猫の恋
 日空の中や霧畑をるる松
 猫のまきく襟のうか鏡より
 紫のまきく襟のうか鏡より
 夕雲を葉を飾りくハ九間
 雉子啼くや鏡のまきく襟を
 鳴や猫陽子一ま成帳む忠

梅華 全路
 柳目 奇静
 琴静 琴静
 磯南 磯南
 空胡 空胡
 毛友 毛友

新垣の志は柳の心
せんし系の白目正きし去の糸
月と糸王たのしむ阿まむの山
大さし念佛の聲や系柳
槐の志は阿や大魁のいあれ時

田原

春の心先まよりや
ふ息や江戸の心
海とや心は坂を山徳家

和歌
松坂
小江
九
八重
四洲

松坂
おまは

中万
素江

短歌の巻 求顔の巻

川は清のまき水の水はぬき
さる柳の心は
公家領を人の心は

麦文
う山
湖家
互山

新雪も程ふらうきり峰は自
 康乃 氣はさへ今も中へ
 嫁入もやそと深ふきかつ
 新ちの医者あつちのさむひ
 活春を海めも公事を捌け
 葉つげの程乃 ちなる東雲
 あ祥一の重さる韃の鷲心
 止らぬ雛子の聲うきけ急

枝苗
 麦支
 う山
 湖岸
 互山
 枝苗
 湖岸
 う山

うしつと藤の病状おのふき
 ちさつと舟のさる桶の傷
 紗の女も母の急病におさし事
 月と云つと雲の
 用替の用も立ぬ古道
 雨のさるちり雪の浅く
 さゆふ花の舟と雲と帆巻
 舟生語も竹よりと松

枝苗
 麦支
 う山
 湖岸
 互山
 枝苗
 湖岸
 う山

秋あき下屋木のやうな

嫁と娘の中のとらふ

厨事斗ふむく伊勢地飽の川舟

河舟舟〜と神楽の娘の

小葉もふち〜と家門の

かたく物のを〜と静ま

あちこちとるを〜と静ま

厠〜と〜と〜と

汗白の只誠切〜と今

柴雪

荷植

素峰

柳紫

川車

淡飯

淡飯

野撫

荷植

細き〜と〜と月の花

花〜と〜と〜と

呂望淑態と〜と〜と

素峰

化和

野撫

去典

子〜と〜と〜と

五蓮

内裏去秋幸社中

聲かきり物なりや猫の恋 路川

里の子は世東よりほかにし松分 望月

角落るるういりきり麻の報 大伴

釣橋の雨にぬれ来し雲の宵 菫菫

葦火焚網の来し鳴き雀 小徳

去る由やききとぞとぞと 松坂 柱月

空晴るるをいと恋をいと 小徳 小徳

梅咲く地をよきまじりて 和加 魚江

木より枝とちよと詠と休と 和加 父梅

詠茶師と無り

小雨は日曇り来りて荒るる 平家

流れるる水は流るる柳の陰 孝石

臨人よ世のふりて 子信

管のまき志のまきと 波扇

うねりの戸はまかき宵の月 警川

おとれ世のなかりと 素江

稲のまきと親子あさりかけ仕立
 お蔭はくろく代系のもも
 あれおれと思ひのほひ小神櫃
 鏡もろりさみき鏡のま
 梅沢と湯治ありのま舞し
 かろれろくあまの乳香子
 辻堂の灯を忍びや川と焼し
 簪、あつれを新らひの月
 此所持を由りきりふさききり

倭扇 子得 素江 子得 素江 子得 素江 子得 素江

穂の穂くしるのうねく
 花の比のほ世業りやこ海まじ
 奈りか人のかさむ浅妙
 返ひさあさちっ系のまの風
 そりやきふとまれとまらぬ
 右猪手たり猪手も麻とさし
 風ハ新し系而ハ鹽し
 神の面を糸の糸糸の出来り
 夏まくるしよるの月

素江 素江 素江 素江 素江 素江 素江 素江

敵庵と哲女をまをたりひて
考齊やつとも能とりふく
ふちり先上字次のかき茶のほいろ時
詞の詞とりのもさ日ま
色初言宗やまの節
若るおろせもあまきなり
廣く宗教は抄子の節流り屏
ね（かみ）滴のちるま
総ねの志より一睡さかきま

子如
素江
磯川
波扇
孝石
子如
波扇
孝石
子得

はらぬほちち小史もねちせし
ま日（ま）後（ま）のあさうり
ふね眼くえき何をゆ

磯川
素江
孝

正月二十八日

梅咲くくまききあり厚水 イカマシ
 雪や花の戸いつふ堂の前 アリマノ 杖雪
 静ま川を流る花の夕月夜 松坂 雪
 蝶花やあしし川に片折戸 お蝶
 水照ねし陸あふく共在中 お貞
 土のわりやめらりくくくく 川車
 雪の夢えりくくくく 硯露
 去の雪やん流るくくく 雪花
 里人の井深きくくく 雪石

奇仙抄

後し場よみ呼吸を響月 公眉
 前やうし後の柳を川 斗雲
 玄園の東陽を蝶のきむ 全
 今し雨あらしきふ 公眉
 今し雨あらしきふ 斗雲
 今し雨あらしきふ 公眉

花傳のなき拂子より古衣
公眉

千千里の道七のとき下足
千眉

星さ白の海きいよもの川とり堂
全

橋の蔭子残あやむろけり
公眉

うき未脱やおろし上戸のむつじを
全

うねふの燕も酔のやんま
千眉

吾河のさ川遠きうきさむよ
全

ちりりあふり運ふ新葉
公眉

秋のま急葉の神事七紙ひく
全

酔の後さる酒のおしり
千眉

花の山茶のむき不り
公眉

めつりさる人のおくま
筆

下略

梅咲や六の東し幾餘る所
 喜柳千のの色ほくく度望か
 若木のむやかるはく小のふく白とむ
 赤の花やしきくわくや星望の及
 朝曇り海道をくく鳴蛙
 む支海あきくく又さく柳のくをが
 去而くくはきくく柳もをみく
 く若くく見き望の志かひの柳太力
 船子の聲ゆるく始代のためく

竹松
 桐蝶
 去竹
 去石
 弁文
 文志

歌仙

於杜月亭

能くを刺の雪けの松子、車
 清きくくあきくくあき子如色
 鞆の括ひま車引く品く
 子ののををくく人きかきし
 清くくくありあきくく月長
 子能くくさかきくく提る鈴鈴

斗雲
 杜月
 竹松
 去子
 弁文
 去石

弟子坊の智勅をうらちの
履を脊負てくまのとも
さへくまの杖をうらち横に
白ひなまの己ぬき能く
陽るふぬの徳の服元成
雪折拂ふ旅人の神
狼のあつる鳴北新藤山
燈よとあつる栗のむき
鳴あんき片破月のねぬか

羊
并父
ある
去子
柱月
并父
去子
斗星

鹿を泣きくう程おひのや
神也の比と為帽子成良を
十己の去乃え狼とく
生く海をうらちのま
信く出くう大船の合
不る程よ人をうらちの
薩河の次き甲斐とある
取ち聲の周涼くき并細工
士用とか能くゆあまの

柱月
ある
去子
斗星
并父
ある
去子
斗星

弘法の虫跡さ続し筆の跡
 びたふ屋き実かう持てひ
 ぞととり更けまき姑籠の聲
 何屋もその、落さう程に
 相の木の葉うへまきんと蓋の月
 五ちほし〜ふ家のいそし
 毛見流子酒きあふ〜は筆やよ
 やくもまきぬ箋、も用立
 ち〜とまき事、福あのをやり出

高石
 柱月
 斗雲
 斗雲
 斗雲
 斗雲
 斗雲
 斗雲

まやま〜と〜の晴り
 千本つと木おとらぬ花さうり
 駒をハ鳴尾なうとり飛

柱月
 斗雲
 斗雲

初春十一の月次

糸を原し月を影さる意の物
 磯山の陰のともかぬ汐子も
 走るへる山路と梅の香り糸
 茶のむよ襟の好けはうり糸
 七碗をふゆもかき菴の梅
 雛の咄や上候下きん桃柳
 懐の子え出より去る風
 去のさし柳をん繞り柳
 誰のものそく英顔や梅の花

和歌
 糸 巴山
 磯山 父梅
 走るへる 桑野
 茶のむよ 京
 七碗をふゆ 松坂
 雛の咄 山田
 懐の子え 乳熊
 去のさし 松坂
 誰のもの 中林
 そく英顔 津和野
 や梅の花 磯川

歌仙

長閑さやゆのさし思ふ意の物
 折ふ梅さるる白ふ茶のむ
 地こたへる子繞る雪を船より
 昔のさしを酒もあふく
 月明り遠を織もむかす風
 志を繞りて露のちりく

望月
 斗雲
 素江
 望月
 斗雲
 素江

任君のりおハリハヤアウラ
 風ハ身ノ立コノ西川
 比取ミハハツヒのウマシ
 空ノ樹ノ情ハハハ
 扇遠カキリハ系モアウ
 法事ノ海ノ波ノミハ
 照月ノ鳥ノ聲ノハ
 露モラカクモ又城壁ノ原
 隣人ノ安ハ系モウチツキ

造子
 其山
 波子
 斗子
 其山
 造子
 斗子
 其山
 波子
 斗子
 其山

七川ノサツ秋モウラハ
 志んハヤモの感ノハ
 本地ツモ河原ノ安カ
 手ノカハハ船辨慶モウ
 くらハ極ウキハ人ヲ
 六日ノウラハヤハ二ノ
 川ノ起カハハスラハ
 眉ノ波モ後ノ安ハハ
 志んハハハハハハハハ

斗子
 造子
 其山
 波子
 斗子
 其山
 造子
 斗子
 其山
 波子
 斗子
 其山

のりてきまの里りの而はま
 峠を越しふくむ梅子
 荷儀の病を陰翳の打堂り
 何とあてとよ念佛の聲
 泥地より名の落込秋の月
 舟を籠りて蟻の飛来り
 冷きまきもあき程喰れらう
 さしを是こころ持契んて
 舟楫へあつたきもいし神入
 之山
 波を
 透る
 子星
 之山
 波を
 透る
 子星

笈車一々い(つりあ
 舟の亭)宗且流(かさり付
 系碗をとりてるハ等
 逸る
 波を
 筆

二月三日

甚真

梅咲や一畝畝芥之も振り之り 修 山

長空をわもるかす一見しや白く 有之

雪や札之有く路やまきま 松 波 喜

自並探懸る道より

川 たりは流ねもる カハハナ 川

朝りきる雲間を免るふ小飯 舟 楳

ふも初や乙多の巻の巻 寸 丈

喜柳 水きき川 坂 有

北地より熱南より移し

まとの梅日さあ 菊 源

海苔の微塵と襦のかき 半 粟

表中き藤より 山 咲

恋念の状を 南 源

ふれはよふ 半 粟

ゆかちり 山 咲

落しふり原ちちちちちちの邑
 南原
 酒走赤雲といはもま入
 半栗
 押一五の着あるくと目推量
 山兜
 去も小時き岩戸のそがは
 南原
 次めしと増とのある花を
 半栗
 月待と星の界やすきを
 山兜
 原首と百とつとささしの銀
 南原
 雪のさささ神もったま
 半栗
 ちのほとたまつとわを
 山兜

機具とかけの縛のね織地
 南原
 解かす先りにほれちひさる
 半栗
 名苗字昔あ詔目さハ
 山兜

春興

去るや次上下子と振白
 半栗
 去るのきひすゆふそ梅のふ
 山兜

又通

去るより後登丸し留るの戸口但し登丸百尾
岸隈や登丸柳の海より

湖外拾吟

大根のふり却れこちうす

湖東 塘里

神去のふり

尾張 曉臺

松とらとら鞠り流の雲の月

梅柳り画かきさくらさくら

士朗

新仙神歌

青柳や護摩子燈く新の露燈

素支

古葉のそと流るるの玄智

斗星

ゆりくや雲ふも雲のひしほ

全

筆を折も七色ののどろ

素支

水而り海の雲巾の雲り

全

夕くさやうかまふりの歌

斗星

光る角の波を流るみえを
 船の若くは河原の人立
 二階の二階へみを通い
 舟の白さを板のあちこち
 時をたしなう船の棧
 硯のありしとふるを
 たすの氣もいとく
 水——の秋の
 信はまの呉服糸りの
 全 全 全 全 全 全 全 全

雲よりとく 孫く
 禁より 孫く
 ちる 孫く
 全 全 全

下略

